



琵琶湖は世界で4番目に古い古代湖であり、その北部、長浜港から約6キロメートル沖合に浮かぶ竹生島は、自然信仰の時代から聖域とされてきた。琵琶湖八景に数えられる景観美、島北側の湖底には縄文期から中世にかけての遺跡が残るなど、歴史に思いを馳せるにはこのうえない場所なのだ。仏教の伝来・発達に伴って神仏習合の霊場となり、都久夫須麻神社は武家・浅井家の氏神とされ、今日も西国三十三カ所巡礼者を中心に多くの人々が訪れている。時代ごとにたゆまぬ信仰を集めてきた神の島が、関西、そして滋賀にも縁を持つ写真家・津田直の目にはどう映るだろうか。風景の中に宗教性を見出す津田の写真と、彼独自のフィールドワークのスタイルを見つめることで、わたしたちもそれぞれに独自の竹生島の捉え方を持つヒントを得られるのではないかと取材に同行した。彼の目線の先にあるのはなんだろうか。

竹生島西側の弁天浜からさらに北に回ったあたりの岸壁。岩の間、あるいは水面より下の洞穴から奥へ進んだ洞窟で僧侶は厳しい修行を行ったという。山肌はかつては青々とした木々に覆われていたが、いまは荒涼とした姿に。

# 湖上の聖域・竹生島、 風景のなかの 物語を見つめる。 [滋賀・長浜]

写真家・津田直

ルポライター・近藤雄生

津田直 Nao Tsuda

写真家。1976年神戸市生まれ。世界を旅し、風景や土地、そこに暮らす人々と出会うことから、ファインダーを通して古代より続々と続く「人と自然との関わり」を独自の風景論を軸に「翻訳」し続けている。2001年より国内外での多数の展覧会を中心に作品を発表。近年では資生堂ギャラリーでの個展が話題に。2010年、芸術選奨文部科学大臣新人賞(美術部門)受賞。2012年4月に近江学研究所客員研究員に着任。作品集に『漕』(主水書房)、『SMOKE LINE』(赤々舎)、『近づく』(AKA+hiromi yoshii)、『Storm Last Night』(赤々舎)ほか。www.tsudanao.com

近藤雄生 Yuki Kondo

ライター。1976年東京都生まれ。東京大学工学部航空宇宙工学科卒、同大学院工学系研究科環境海洋工学専攻修士課程修了。2003年に日本を立ち、妻と共に5年間世界中で旅と定住を繰り返しながら、ルポライター、ノンフィクション作家として活動。08年暮れから一応の京都定住生活。著書に『遊牧夫婦』とその続編『中国でお尻を手術』(ミシマ社)、『旅に出よう 世界にはいろんな生き方があふれている』(岩波ジュニア新書)ほか。www.yukikondo.jp







竹生島の東北部に、インターネットの地図には記されていない小さな島がある。かつてはこの島と竹生島の間にしめ縄が掛けられていたという。

# 琵琶

琵琶湖北東岸の長浜港を中航して5分ほどが経った船の中で、津田が言った。

「手漕ぎ船だと、竹生島までどのくらいかかるんでしょね」

湖の北端近くに浮かぶ竹生島まで、この定期遊覧船では30分。同じ距離を、千年以上前の人間がどのくらいの時間をかけて渡ったのか。津田はそんなことを考えていた。

船の後ろには、霞がかかった空の中にうつつすらと、白雪の伊吹山が見える。前方からは、瓢箪のような形をした緑の竹生島の姿が、徐々にはつきりとした輪郭を帯びてくる。船の速度は違えども、本州の陸を離岸して、島へ向かうときの風景は、いまでも昔もそうは変わっていないはずだ。

竹生島は、かつて多くの僧侶たちの仏法修行の場であった。奈良時代、南都(奈良)仏教の山岳修行者の一人であった行基が、修行の場として竹生島に渡ったのが、その始まりだとされる。そうして行基が竹生島に仏教を持ち込み、その後平安時代になると、比叡山の天台仏教の僧侶たちが、次々に島へと渡るようになっていった。

一方、竹生島の神としては古来より浅井姫命が祀られていた。だが平安末期ごろから、浅井姫命とともに、島主として「弁才天」が登場するようになる。弁才天とは元来ヒンドゥー教の女神。それが仏教に取り入れられ、仏教伝来とともに日本に渡り、いつしかこの島の主となっていく。弁才天は、この湖を守る神である。ただ同時に、竹生島にやってくる修行僧たちにも力を貸すことになっ

た。島の南西方向に大きくそびえる比叡山の仏法を守るといふ役割も担うようになるのだ。そうして竹生島には、仏教と神道がともにいつく神仏習合という形の信仰が根付いていった。

竹生島の主が弁才天である意味は極めて大きい。もしここに弁才天がいなければ、「琵琶湖」という名前もなかったかもしれないのだ。「琵琶湖」の名が文献に現れ出すのは高々500年ほど前のこと。なぜ、その名前になったか。周囲に琵琶湖を一望できる場所はなく、どの山からも全貌は見えない。その中でどうやって、この湖の形を、楽器の琵琶と関連付けたのか。そこで大きな意味を持つのが、手に琵琶を持つ弁才天の存在なのだ。津田は言う。

「琵琶湖」という名前が生まれたこと自体に物語性があるんですよ」

津田は以前、「漕(こぎ)」という作品で、琵琶湖から消えゆく「丸子船」を写真の中に定着させ、船に新たな命を吹き込んだ。関西に育ち、祖父に連れられて琵琶湖の周辺にはよく行っていたという津田にとって、琵琶湖は客観的な対象以上の存在に違いない。この湖が持つ物語に、彼は当然のごとく魅せられた。

船は竹生島に南側から近づいていく。島の南岸にぐっと突き出た岩場があり、その上に大きな石造の鳥居が立っている。まるで自分たちを迎え入れるかのようなその鳥居に向かって、津田が何度かシャッターを押すと、船は速度を下げて棧橋へと横付けされた。

「あれが以前、しめ縄が張ってあったところだよ」

島に着いた直後にまず、尾上漁港の漁師の船に乗せてもらって竹生島の周りを一周している途中で、漁師が言った。

1周2キロしかない島の南側から船に乗り、時計回りに10分も移動したころだろうか。それはその昔、僧侶たちが修行の場とした洞穴の跡だった。穴は15メートルぐらいの奥行きがあり、その先に修行場があったらしい。津田はそこに目を奪われるように見入り、写した。しかしいまは、しめ縄も洞穴も、すでにない。原因は、川鶴という鳥にあるらしい。

寺院などの建物が点在し、人間が活動する島の南側は、豊かな木々で覆われているが、船が少し北側に向かうとほとんど禿山に近くなる。数十年前から川鶴がコロニーを作り、何万羽という単位で住み付くようになり、その営巣や糞によって、ほとんどの木が枯れてしまったというのだ。この洞穴もまた、川鶴によって木が倒されたことで地盤が緩み、土砂崩れを起こした結果、塞がれてしまった。その上から水が流れ、以前はなかったという小さな流ができていた。

島の北側、東側は、姿を消した木々の代わりに大地を補強するべく、熊笹が人工的に植えられている。ここ数十年のこととはいえ、島は明らかに姿を変えていつているのが見て取れる。なぜ川鶴がこの島に増えたのかは漁師たちにもわからないというが、そのタイム

\*



スケールを考えれば、なんらかの人間の活動が関係していることは明らかに思える。

そもそもこの島は、人間がやってくるようになって以来多くの変化を遂げてきた。仏教の伝来、弁才天の上陸。そうした積み重ねの上でできた神仏習合の姿。信仰のあり方も、時代とともにいろんな段階を経ていまに至っている。しかし、その過程の中で見えなくなってしまうものもあるのかもしれない。津田はこの島の「本来」の姿を見ようとしていた。津田がこの船に乗る前にこう言っていたことを思い出す。「歴史を掘り下げるときに大切なのは、見えないものをいかに見ようとするか」だと。「一番重要なものがすてなくなってしまう場合も少なくない。

い。でも、消えてしまった歴史を想像し、そこに視点を持つていくことでこそ、文化は受け継がれると思うんです」。そう彼は言った。

\*

漁師の船を降り、再び島に上陸し、歩いた。ぼくは、津田が何を撮るのか、彼が何に心を動かされるのかを見たいと思った。彼が写真に写し出そうとしている「見えないもの」とは何なのか。

気付いたのは、彼がこの島の見所とされる重厚な建築物そのものには、あまりカメラを向けなかった。竹生島の中核をなす宝厳寺の境内を歩き、ただ一つひとつを丁寧に

見つめ、ゆっくりと歩を進める。大きな屋根と朱色の色彩が印象的な弁才天堂。その中に安置される一体の大きな弁才天像、弁才天堂からさらに階段を上った先にある三重塔。

そして今度は急な階段を下りた先に巨大な唐門が見えてくる。400年前に豊臣秀頼によって京都から移築された壮麗なこの唐門には、津田は慎重にレンズを向けて撮影したが、唐門の奥に収まる観音堂、その先に続く舟廊下には、容易にはレンズを向けなかった。その一方で、津田の、神道や仏教への関心の深さが、話すほどに伝わってくる。実家には神棚があり、神主さんも日常的にやってくる中で幼少期を過ごしたこと。また、彼が強く影響を受けた祖父が、長年仏教の勉強を

## 船

津田が船に乗る前にこう言っていたことを思い出す。「歴史を掘り下げるときに大切なのは、見えないものをいかに見ようとするか」だと。「一番重要なものがすてなくなってしまう場合も少なくない。



都久夫須麻神社龍神拝所を沖から臨む。奥には本殿があり、向かって左に舟廊下、宝厳寺観音堂が連なる。





続けていて、悩み事があるたびに比叡山の住職に相談に行き、何日か山に籠ったりしていたこと。

「ぼくは昔から、神道も仏教も、両方がずっと身近だったんです」

そんな過去を聞いてぼくは思った。津田にとって写真を撮ることとただ見ることは、どちらが重いのか。暗い観音堂の中を歩きながら聞いてみると、こう言った。

「基本的に、撮ることより見ることでいい。極論をいえば、撮れようが撮れまいがどっちでもいいんです」

しかし、写真でしか見えないものがあるという。「カメラは基本的に単眼なので、単眼的な考え方が残る。写真は shooting って言い方をしますよね。shoot、つまり獲物を狙うときは必ず片目を閉じて単眼になる。一つの点を見るにはその方法しかないだろうと思うんです。でも普段歩きながらものを見るときは、2つの目で、つまり複眼的な見方になりますよね」

単眼と複眼、つまり2次元と3次元を行き来することで、複眼だけでは見えないものが見えてくるはずなのだと言っている。それが津田にとって写真を撮ることの一つの意味のようだった。

津田が単眼で瞬間を切り取り、その奥にある見えないものを透視したいと思う場所はどこなのか。そんなことを考えつつ、観音堂から舟廊下を渡り、都久夫須麻神社の本殿へと

出る。仏と神が隣り合って並ぶまきに神仏習合の地らしいこの一角で、一つひとつの神に手を合わせてゆつくりと参拝する津田の後ろ姿を眺めた。

本殿正面の階段を下りて、そのまま南向きに歩くと水際が近づく。そしてその先にある拝殿へ。つまり、南に向かって本殿、拝殿、水面、という位置関係になる。

すね、ここは

津田がこの場所に大きく反応しているのが見て取れた。彼は突然、水路が開けたように、流れるように話し出した。

「ようやく着いた、竹生鳥ってここだったのかって感じがするなあ……。一番ここが、湖と関係がある場所に思えます。たとえば、さっきまでヘビの体の中を歩いたのが、その口からいま、

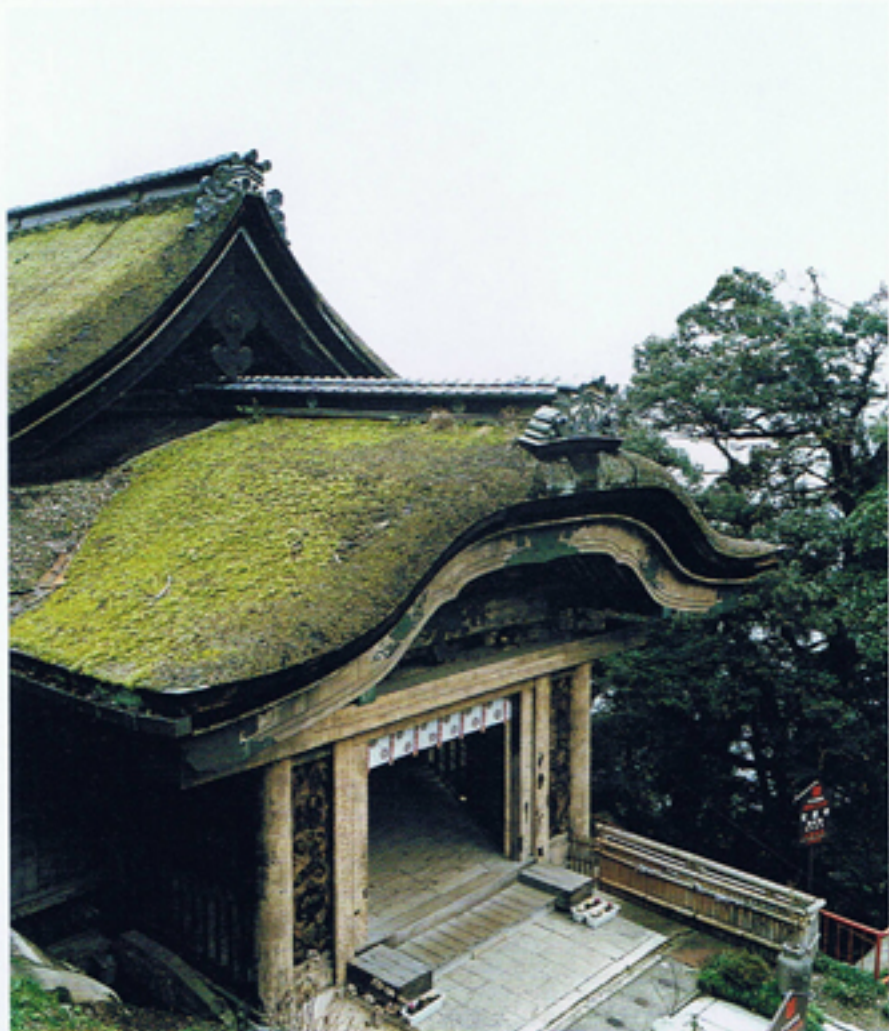
しゅーっと抜け出たような感覚というか。船の、へさきにいる感じがしませんか。まるでこの鳥が湖の中を進んでいつてるみたいなの錯覚が」

ぼくは大きく頷いた。竹生鳥がまさに命を吹き込まれ、この湖の主として、音を立てて動き出すかのような錯覚がした。いや、津田の視点を共有することで、実際に、ぼくの中でこの鳥の存在は動き始めていた。

拝殿の正面は湖面の清らかな透明感に満ちている。この鳥が栄華を誇った中世には、建築物がいま以上に絢爛であったろうことを考えれば、後ろにある本殿と湖の透明感のコントラストは、さらにくっきりしていたのだろう。津田はそう想像する。

そして拝殿の中の龍神の祭壇が、本殿ではなく湖の方を向いているのを見て津田は真に納得したような顔をした。

「ここ以外のすべての祭壇が、鳥に向かって拝むようにできていた。それは、これまで見



拝殿から南向きに下前方を見ると、船から見たあの石の鳥居の後ろ姿が大きく見えた。

その向こうには、湖水面が、空とぶつかって水平線を作るところまで、まるで海のように続いている。その風景が視界に入った瞬間、津田は、透き通った空気に吸い寄せられるように水面を見つめて言った。

「ここじゃないですか」。明らかに違いま

(上)唐門(国宝)は奥に続く観音堂と繋げるため柱を切り、高さを合わせたそう。慶長7(1602)年に豊臣秀頼によって豊国廟より移築したとされてきたが、近年の調査で大坂城極楽橋の移築と分り、秀吉時代の大阪城唯一の遺構として注目されている。

(右)観音堂から都久夫須麻神社本殿に続く約30mの渡り廊下「舟廊下(重文)」は、慶長7(1602)年に豊臣秀頼が秀吉の御座船「日本丸」の船櫓を利用し建てたもの。土台部分が清水の舞台のような態で建てられているのが分かる。



琵琶湖に面した押般に龍神を祀る。願いを書いた土器(かわらけ)を岸に建つ宮崎鳥居に向けて投げ願掛けをする「かわらけ投げ」(200円)は、鳥居の下をくぐると願いが成就すると言われている。





てきたのが人間の世界、人間の生活を想って  
拝む場所だったのに対して、ここは何かも  
と大きいものとの関係性に向かっているとい  
うことでしょうかね」

賑やかで活動的な寺社仏閣と人々の世界が  
後ろにあり、しかしここに立つと一転して、  
透明感に満ちた湖が広がる。人間の生が  
息づく世界と、人間の手の届かぬ世界。  
その双方が、いま目の前にある。

祭壇の前には一つの丸い鏡があった。  
それは、これより向こうは踏み込んでい  
けない聖域だ、つまり、湖の方に神が  
いることのサインなんだと津田は考え  
る。

「島にいながらにして湖を拝むのはこ  
こだけ、という特別なものを感じます  
ね。この場所があるから、他のものは内  
側向いてられるのかなって。とても完成  
度が高い関係性ができ上がっている」

そして彼はここでも、静かに礼をし、  
湖に向かってじつと手をあわせ続けた。

「ぼくは、できるだけ物事を特別視し  
ないようにしているつもりです。それ  
も、ここは何か特別なものかもしれない  
て気がしてしまいます」

津田が積み重ねる言葉によって、竹生  
島はどんどんその衣を剥ぎ取られてい  
く。人々が神や仏に寄り添い寄り添われた時  
代の生々しさや清らかさが、湖面を前に浮き  
上がってくるような気がした。

信仰とは本来、極めてシンプルなものな  
のではないか。大きな山や広大な海があれば、  
それらが与えてくれる恵みがそのまま神とな

り、信仰の対象となる。壮麗な本殿や建築物  
などは、時の権力者の力の強さや信仰の熱  
心さを具現化したものであったり、あるい  
は、信仰をより広く簡単に行き渡らせるため  
のシンボルとして作られたものと考えてもい  
いだろう。とすれば本来は、豪華な建築物は



しれない。しかし、静まり返ったこの島の風  
景を前に、それは強い説得力を持つてばく  
中に沈みこんでいった。  
ちょうどそのころ、鳥居の向こうに、フェ  
リーが見えた。ぼくたちが乗って帰ることに  
なる船だ。本土からやってくる船を見ながら  
津田は、こうして自分たちを外界とつな  
ぐ存在を見ることが、いま自分が島にい  
ることを実感する上で大切なものかもしれ  
ない、と言った。

\*

「見えるものは撮れて当然とぼくは考  
えています。見えないうものをいかに撮  
り、いかにつなぎとめるか。そこそが  
写真家の役割だと思えます」

島を離れゆく船に乗りながら、もう一  
度島を眺めてみる。行きとは全く違った  
風景が見えた。見えなかったものがわず  
かながらであれ自分にも見えるようにな  
った気がする。離れゆく竹生島を見つ  
めながら、自然と、この島へ行き来した  
修行僧たちに自分をだぶらせた。弁才天  
が住み始めたころの島の姿がぼんやりと  
浮かぶ。さらにその後ろには、弁才天が  
いなかったころの古代信仰の時代のこの  
島と、中国、そしてヒマラヤ圏へとさかのぼ  
る仏教の世界へと想像が広がる。

津田は見事にこの島の心臓部を探り当て  
た。しかし彼はそこに、竹生島という島だけ  
を見ているわけではない。津田はこの島の向  
こうに、全世界を見ていた。

## ◎対談・木村至宏×津田直 近江学の第一人者に聞く 竹生島の歴史といま。

竹生島取材して巡った翌日、成安  
造形大学附属近江学研究所所長である  
木村至宏先生との対談が実現。津田が  
見た島のこと、木村先生が研究し続け  
る島のこと……。世代を越えてのクロ  
ストークは広がりを見せ、これからの  
話まで。

### なぜ竹生島か。

木村…今回、竹生島に眼を付けられた  
というのはなかなかすごいですね。

琵琶湖には4つの島があります。4  
つも島がある湖は日本では琵琶湖だけ  
ですが、島自体も個性的なんです。た  
とえばその一つの沖島は、350人の  
住人がいる島です。700年の間、人  
が住んでる島、しかも湖の中というの  
は、世界にも数えるほどしかありませ  
ん。そして竹生島。人こそ住んでいま  
せんが、この島は、日本で信仰の島、  
霊島といわれている本場に数少ない島  
の一つです。特に、湖の島で平安時代  
から霊島といわれているのは、竹生島  
ぐらいでしょう。



木村至宏 Yoshihiko Kimura  
1935年滋賀県生まれ。大津市教育委員会  
文化財保護課、大津市史編纂室室長、大  
津市歴史博物館初代館長を務めるなど、  
長きにわたり滋賀の歴史文化にまつわる  
研究に携わり続ける。現在も成安造形大  
学附属近江学研究所所長としてフィールド  
ワークを重ねる滋賀の歴史文化の第一人  
者。主な著書に『図解 滋賀県の歴史』(編  
著・筑摩書房)、『近江戦国の道』(サンライ  
ズ出版)、『近江の道標—歴史街道の証人』  
(京都新聞社)、『琵琶湖—その呼称の由  
来』(サンライズ出版)など。

は、西国三十三所観音霊場の札所とし  
てでしょう。西国三十三の巡礼は、古  
くから伊勢神宮に詣でた人が、その後  
に行くものでした。和歌山県的那智山  
から始まって、大阪、奈良、京都、滋  
賀、兵庫を経たあと、また滋賀に戻  
り、最後に岐阜に行くというルートで  
す。昔は庶民が旅に出るのは大変だっ  
たんですが、信仰という名前がつくと  
出やすかった。観光と旅、巡礼とは切  
り離せないものなのです。

竹生島・宝蔵寺は、その第三十番札  
所に当たり、最後の3つ手前に竹生島  
がある。できるだけ山とか川とか平野  
とかいろんなレイションを歩いた人  
たちが、神の島と言われたこの竹生島  
に行くところという意味があったん  
ですね。

竹生島には、都久夫須麻神社と宝蔵  
寺が並び立ち、神仏習合の信仰があり  
ます。ただ、ゆっくり見ようと思っ  
て、連絡船の発着時間に合わせると、  
なかなか難しいかもしれませんが。

津田…確かにそうですね。ぼくも今  
回、島に行ってみて感じたのは、乗っ

てきた船から降りたあと、その船が  
帰っていく後姿を見送ったときに初め  
て、竹生島に着いたという実感が湧い  
たということなんです。それはおそら  
く昔の人が島に渡ったときも同じで  
しょう。対岸とは切り離された浮島で  
別次元の時間軸に踏み込んだって思っ  
たときに、自分の内側の変化を感じるの  
ではないか。それがあるいは信仰と結  
びつき、そこで初めて、島に受け継が  
れてきた神仏の原形というものに寄っ  
て歩める時間が得られるのではないか  
と。

だから、乗ってきた遊覧船が待って  
いてくれる70分間にさっと見て帰る  
のではなく、一本見送って次の便で帰  
るといった旅の仕方もいいんじゃない  
かって思っただけです。船を見送って、  
人が去って音のしない島に残ったとき  
に見えてくるものがありました。

木村…やはり船というのは、彼岸へ行  
くんだという感覚、離れる感覚を持っ  
てますよね。30分という短い船旅で  
も、竹生島から離れるときは、もうい  
つこられるかわからないと感じる。だ



から、そのときを大事にしないとって  
いう気持ちが起こりたりするんですよ  
ね。陸の続きにあるところと違って、  
島というのは、人間の心の起伏を感じ  
させる場所ですね。

津田…島というのは、物語が生まれる  
場所だと感じます。アイルランドを  
旅したときのことですが、あの国に  
も、竹生島ぐらいの大きさの島が結構  
あって、そういう島にキリスト教の初  
期の修道院はあるんです。まだその島  
に修道院がなかった3〜4世紀に、対  
岸に立つてその島を眺めた人間はおそ  
らく、「あそこでだったら、全く違う  
ことを始められる」という気持ちにさ  
せられたんじゃないでしょうか。見え  
ているけど、届かない。そして自然に  
よって完全に隔離されている。島とい  
うのはそういう場所だからこそ物語が  
生まれる。竹生島に信仰が宿ったって  
いうことにも、同じようなものを感じ  
ます。

### 滋賀・近江の魅力。

津田…滋賀・近江は、いまは地味に見  
えるけれど、歴史の中でもその存在は  
大きくて、とても魅力的なエリアだと  
思います。ただ、やはり京都にはみな  
泊りがけで行くけれど、滋賀に1泊で  
行く友だちはなかなかない(笑)。通  
過する場所になってしまってる。

木村…京都・大阪の人にとっても、滋  
賀というのははるか山の向こうという

感じなんです(笑)。でもそういう  
人たちが年齢が高くなって近江関係の  
本を読むなりして、寺社仏閣、名勝名  
跡が多いことを知ると、こっちに来る  
ようになるんです。

それから滋賀県は、ここ5年ほど日  
本の中で人口増加率がトップクラス  
で、滋賀県に移りたいという人が多い  
んです。なんでですかって聞くと、理  
由は3つあって、一つは環境がいいこ  
とです。やはり琵琶湖ですね。水は環  
境のパロメーターですから。次は、歴  
史を体験できるということ。歴史の  
跡や文化財、民俗的な文化がまだたく  
さん残っているし、それを残していこ  
う、伝えていこうという意識が地元  
にあります。あと3つめは、アクセスで  
すね。大阪、京都からも通勤圏内に  
あって、意外と便利なんですよ。

津田…京都に何度も訪れたシニアクラ  
スの人が、滋賀の方に目が向くのかも  
しれませんね(笑)。

ぼくは、滋賀が通過する場所になっ  
てしまっているのは、ただまだ滋賀に  
「たどり着いてない」だけなんじゃな  
いかと思うんです。たとえばぼくらの  
世代でいえば、チベット密教などに興  
味ある人は結構多いと感じます。そ  
ういう人はきつと滋賀にはまる気がす  
るんです。インドで生まれた仏教がヒマ  
ラヤ圏を経る中でかなり特殊な宗教性  
が生まれた。それが、比叡山、琵琶湖  
といった場所と関係を持っている。滋  
賀にはそういう特殊なランドスケープ  
があって、フィットする人は多いはず

なんです(笑)。

### 写真家・研究者という 垣根を越えて。

木村…単に風景を撮る写真っていうの  
が一般的の中で、津田さんの、写真の  
裏側を見ると、透視するかのよ  
うな形で写真を撮るという方法に前か  
ら注目しておりました。

津田…いま写真家に問われていること  
の一つは、見えにくくなるものを写真  
によっていかにつなぎとめるかだ  
と、思っています。歴史という大きなテ  
ーマに踏み込もうとすると、大方の  
はずでに形がなくて輪郭程度しか残っ  
ていない。その中で、いまを生きる我々  
が歴史に手を伸ばそうとすると、たと  
えば誰が残した逸話だったか、ガイドし  
ておもしろいものがある、ガイドとし  
て有益になってくる。ぼくのような世  
代の人間が歴史について何かを知ろ  
うとするときに、そういう方法で、世  
代を超えた人と対話することが大切  
になります。たとえば竹生島において  
も、自分はいま木が枯れていった現在  
の斜面しか眺められないけれども、た  
とえ素人の写真であつても、何十年も  
前に撮られた青々とした島の写真を  
見ると、それは何百年も前に撮られ  
たものと結びつくような気がするん  
です。つまり、写真家、研究者といっ  
た枠や垣根を超えて、いろんな見方  
をつなげた状態で今日の文化圏を見  
直すということが大切なのではないか  
と、思います。

まこそそれをしないと、本当に、誰も  
何も見えなくなってしまうんじゃない  
か、という怖さを感じます。

木村…そうですね、歴史とか文化とい  
うものは、人間の営みの積み重ねであ  
り、そこからでてきた結晶物をあとか  
ら見たら、歴史、であつたということ  
です。それは記憶の中に残っていつ  
も、そのものが消えていくということ  
が多いわけです。それを写真に残す。  
その写真から、その背景なり、周辺  
部分が何を表しているのかということ  
まで読み取ることができれば、その写  
真が生きてくる、動いてくるという感  
じがする。もうすでにあるものだけ  
が。歴史、というわけではありませ  
ん。歴史は動いていますし、風景も  
また動いています。移り変わりもあ  
ります。だから、写真と歴史とが  
コラボレーションすること、いま生  
きている人たちに對して、ああ、  
そうか、なるほど、と追体験し、  
見直してもらおう、というきつ  
かけをもたらすことができる  
のではないかと、常々考えていま  
す。

津田…本や写真が、歴史を追体験する  
上で、新たな扉となる、ということ  
がありますね。ぼくたちはその扉を  
ちつと作っていく、いけない。ぼ  
くはこれから近江学研究所の客員研  
究員という形で一緒に仕事をしてく  
ことになりませんが、滋賀という場所  
を自分なりに捉え、残し伝えてい  
ければと思います。